

受賞作品
2023

近松文 さばえ 学賞

- 恋話 (KOIBANA) RETURNS -



【特別審査員】 藤岡 陽子

「三十代独身女性の心の
揺らぎが迫る作品でした。」

さばえ近松文学賞

～恋話（KOIBANA）RETURNS～

受賞作品集

2023年

◆受賞作品◆

◆近松賞

「予感」

南 理維（東京都町田市）

◆優秀賞

『紅い灯』

山崎 幸子（東京都中野区）

「ボンコツ眼鏡と青い空」

辻 真実（東京都世田谷区）

◆佳作

「鯖江まで」

打越 保（兵庫県西宮市）

「すれちがい」

増田 信（東京都北区）

「愛なき星の女神たち」

高橋 祐太（東京都杉並区）



さばえ近松文学賞 ～恋話 (KOIBANA) RETURNS～

〈結果発表〉

一、日時 八月二十六日(土) 十五時
二、会場 立待公民館 研修室

〈近松賞〉

南 理維 (東京都町田市)

「予感」

〈優秀賞〉

山崎 幸子 (東京都中野区)

「『紅い灯』」

辻 真実 (東京都世田谷区)

「ホンコツ眼鏡と青い空」

〈佳作〉

打越 保 (兵庫県西宮市)

「鯖江まで」

増田 信 (東京都北区)

「すれちがい」

高橋 祐太 (東京都杉並区)

「愛なき星の女神たち」

一、募集期間 令和五年一月一日～六月二十日

二、応募総数 二百六十三点

三、選考委員 特別審査員 藤岡 陽子 (小説家)

審査員長 水間 賢子 (元崎市国語科研究部長)

審査員 林 哲治 (さばえ近松県東部代巻)

審査員 四戸 友也 (元福井新聞編集本部長)

審査員 三田村悦子 (滋賀文教短期大学非常勤講師)

主催者 近松の里づくり事業推進会議



特別審査員 藤岡陽子（小説家）

講評

三十代独身女性の心の揺らぎが迫る作品でした。

次の展開を期待させる構成力、目の前に光景が浮かぶような描写力、そしてなんといつても登場人物たちに魅力があり、物語にぐいぐいと惹き込まれました。

印象的なせりふが随所¹にあり、フタバアオイや石田縞などの小道具の使い方にもセンスを感じました。そしてなにより明るい広がりのあるラストに、審査員全員が魅了²されました。



審査員長 水間 貴子

総評

前回の文学賞に応募があった作品群を「平成の恋話」と名付けさせてもらうと、五年ぶりの今回集まった263作品は「令和の恋話」と言えるかもしれません。前者に比べ、男女の恋愛に限らない設定の作品が増えたこと、SF、ファンタジーと言うジャンルの作品の割合が増えたことの二点が、平成から令和への時代の変化を反映しているように感じました。

しかし、「恋話」は、いつの時代にあっても色褪せないもの。それこそ、近松の生きていた時代でも、現代でも、そして未来においても、人が生きている限り、紡がれていくものだと思います。ですから、選定の基準には、登場人物の心情、行動がリアルに描けているかどうか、大きな基準となりました。入賞した作品は、どれも、短編という制約の中で、このことに成功している作品で、読み応えのあるものばかりだと思っています。

目次

◆受賞作品◆

◆講評・特別審査員 藤岡 陽子

◆総評・審査員長 水間 貴子

目次

「予感」 南 理維（東京都町田市）

『紅い灯』 山崎 幸子（東京都中野区）

「ポンコツ眼鏡と青い空」 辻 真実（東京都世田谷区）

「鯖江まで」 打越 保（兵庫県西宮市）

「すれちがい」 増田 信（東京都北区）

「愛なき星の女神たち」 高橋 祐太（東京都杉並区）

近松の里 たちまち スタンプラリー

■さばえ近松文学賞 く恋話 (KOIBANA) RETURNS ■主催者

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲など

の編集は加えておりません。

駅の二階にあるカフェの窓からは、霧雨に煙る町と、町の向こうの山が見える。

「沙穂ちゃんが鯖江に来る日はいつも雨だね」

今日も駅まで車で迎えに来てくれる従妹の美紀は、そう言って笑うはずだ。ひとつ年下の美紀は口下手な自分とは真逆のタイプで、よく喋る。やることなすこと素早く、大学卒業と同時に、在学中に知り合っていた開業医の跡取り息子の子元へ嫁ぎ、翌年には男の子を産んだ。その子ももう高校生になる。

時間は誰の上にも等しく流れているのに、掴んでいくものの数や量には差が生まれる。四十手前の独身女には何とも重い現実だ。

また目を窓の外に向けると、空は幾分明るさを増していた。雨はじき止むかもしれない。―でも、雨上がりの後には大きな虹が、なんていう光景は、私の人生には現れない。

胸の透くような出来事には無縁、ととくに諦めている。やるせなさには視線を下に移すと、歯科医院の大きな看板が目に見えび込んできた。どこへ行っても見つけてしまう歯医者看板

から目を逸らし、バッグの中からイタリア料理のレシピ本を取り出した。

調理師として、横浜の電機メーカーの社員食堂で日々、唐揚げやポテトサラダを拵えているにもかかわらず、休日も何か作りたいと思う。それくらい料理は好きだ。

レシピ本からしおりを抜いたとき、スマホが震えた。美紀からのメールだ。

「夕食の買い出しが間に合わないから、かわりに杉田さんに迎えに行ってもらうね」

―はあ？　夕食つて、まだ二時なんだけど。それに、杉田さんつて、あの杉田さん？

美紀の自宅兼クリニックの隣にある薬局で、数年前から働いている薬剤師の杉田さんの丸い顔を思い出した。なんで、杉田さんが迎えに来るのよ？　急いで「タクシーで行くから、迎えはいいよ」と返信したが、すぐに「杉田さん、もう車で出たよ。できれば、カフェで一時間くらい時間調整してほしい」と返ってきた。

時間調整つて？　なんか嫌な予感がする。

―まさかマッチングとか企んでないよね。

かつて美紀に一度だけ、結婚はしないの？と聞かれたことがある。そのとき、はつきり言ったはずだ。私は男性にも家庭にも縁がない、と。

物心つく前に両親は離婚。シングルマザーになった母は仕事に追われ、家事や育児にまで手

が回らなかった。子どもの頃の食事はコンビニの菓子パンが多く、気がつけば、口の中は虫歯だらけになっていた。そのせいで今も歯医者と縁が切れないが、母とは早くに疎遠になった。娘の専門学校卒業を待っていたかのように再婚し、家を出て行ったのだ。

母の妹で、美紀の母親である叔母はそんな姪を不憫に思い、面倒を見てくれた。美紀も実の姉のように慕い、嫁いだ後もしょうちゅう「遊びに来て」と誘ってくれた。その優しさに甘えて、毎年ゴールデンウィークには鯖江に向かった。美紀の家で数日間お世話になる前のちょっとした緊張をほぐすために、待合せ場所は駅の改札ではなくカフェにしてみらっていた、などとあれこれ考えていたら、あの、という声がして、顔を上げると、ポロシャツ姿の杉田さんが目の前に立っていた。

「杉田です、お久しぶりです」

「えっ、あ……」

戸惑っているうちに、杉田さんは向かいの席に座り、コーヒーを頼んだ。

何か話さないと、と焦っていると、杉田さんがあれ、とさっきレシピ本から抜き取って、テーブルの上に置いていたしおりを指さした。

美紀の息子が小学生のときに作ってくれたものだ。子どもらしい字で「ありがとう」と書かれた紙の裏には、ハートの形をした二葉葵の葉が添えられている。

昔から京都の葵祭の飾り物に使われる二葉葵は、鯖江の特産物だ。立待地区の小学校でも栽培している、と美紀の息子は得意げに話していた。

「僕も持っています。子どもたちから貰いました」

―あ、子どもがいるんだ。

白髪があつて、少しお腹も出ていて、明らかに同世代の外見なのに、勝手に独身、と決めていた自分が急に恥ずかしくなった。

「お子さん、何年生ですか？」

「いえ、僕は独身ですが、毎週日曜日に、近所の小学生三人と昼飯を食べています」

「それって、いわゆる子ども食堂ですか？」

話は意外な方向へ展開した。

「子ども食堂というほどのものでは……」

でも、その子たちって、と言おうとして、口をつぐんだ。聞かなくても想像できる。杉田さんと仲良しというだけでなく、おそらく休日も親が働きに出ている子たちだ。

「近所さん、あ、美紀さんもよく、食材を差し入れてくれます。といっても、僕はカレーとか豚汁くらいしか作れないのですが」

「それでいいんです」

咄嗟に言いきったことに、自分でも驚いた。

「ご飯を作ってもらえたら、嬉しいです」

一瞬、子どもの頃の自分が言っているような、そんな感覚すら覚えた。

「でも、さして手間のかかる料理は作ってないかも」

「手料理というだけで十分です。それに、手間って料理だけに限りません。ちょっとしたこと、たとえば盛り付けとか器とか」

子どもの頃、テーブルに無造作に置かれた菓子パンを見て、せめて袋から取り出して、お皿にのせてくれたら、とよく思ったものだ。

「盛り付けに工夫ができるほどの品数は作ってないし、食器も良いものは持ってなくて」

じゃ、私が、と言いかけたものの、持合せの現金は少ない。良い食器は買えそうにないが、それでも何かしたい、せずにはいられない。何かないかな、と考えたとき、ふっと頭を過るものがあった。

「すみません、ちょっと寄り道をお願いしてもいいですか？」

杉田さんが了承してくれたので、美紀に「買い物してからお宅に行きます」とメールした。

「これ、私もここで買って、愛用しています」

立ち寄ってもらったお店で、手にしたのは鯖江の伝統的な木綿の織物、石田縞で作られたランチョンマットだった。ブルーとグレーのリバーシブルで、その素朴な色合いは不思議とどんな料理にも合った。

「子ども三人と杉田さん、美紀の分も」

計五枚を持ってレジに向かうと、杉田さんが一瞬、戸惑いの表情を見せたので、ほんの気持ちです、と言って、会計を済ませた。

ちよつとトイレに、と言った杉田さんより一足先に外に出ると、雨はすでに止んでいた。

再び杉田さんのワゴン車に乗せてもらい、美紀の家に向かう。

「昨日は、雨上がりに大きな虹が出ていたんだけど、今日は出てないな」

地元の人と言う「銀杏のならない銀杏並木の道」をまっすぐ進みながら、杉田さんは独り言のように呟いた。助手席から覗いた横顔はこの上なく穏やかで優しい。

「私、大きな虹って見たことないです」

たぶん、この先も、と言いかけたとき、

「そのうち、見られますよ」

前を向いたまま、杉田さんは笑った。

その夜は美紀の家で、美紀の家族と杉田さんと一緒に夕食をとった。

「ねえ、沙穂ちゃん、明日、杉田さんの手伝いに行かない」

ワイングラスを片手に、美紀が言った。

「いいんですか？」

私と杉田さんが同時に応えたので、美紀はぷつと吹き出した。

翌日、美紀とスーパ―で買った食材を持って、杉田さんの家に伺った。

亡くなった二両親が遺してくれたというその家の、システムキッチンではない昭和感溢れる台所で、早速、ふわとろオムライスと春野菜たっぷりのミネストローネスープを作り始めた。ケチャップをかけ終えたオムライスの皿を持って後ろを振り返ると、杉田さんがテーブルの上にランチョンマットを敷いていた。ブルーの面、グレーの面を交互に三枚ずつ、え、なんで、なんで六枚？という私の声に応えるかのように、杉田さんは笑った。

「実は昨日、僕も追加で一枚買ったんです」

―あ、昨日、私が先に店から出たときだ。

あの時から、杉田さんは私の参加を望んでいたんだ、そう思ったら、自然に頬が緩んだ。

「あつ、子どもたちが来た」

杉田さんは、男の子三人を迎え入れ、テーブルにつかせると、この人が作ってくれたんだよ、

と少し照れながら私を紹介した。

皆で「頂きます」をすると、子どもたちは大きいスプーンを元氣よく口に運び始めた。

その食べっぷりに感心していると、向かいに座っていた一番小さい子と目が合った。

「また作って」

弾んだ声に、うん、と素直に頷いていた。

それで今年はお盆休みにも、またこのシルバーウィークにも鯖江に来てしまった。頻繁過ぎるのでは、と迷いもしたが、子どもたちと杉田さんからのリクエストには抗えず、結局、駅の二階のカフェで迎えを待っている。

前回、お盆休みのときも、杉田さんが車で迎えに来てくれた。どうしてなのか、正直気になってしかたないが、理由を聞く勇氣はまだでない。でもたぶん、今日も杉田さんが迎えに来てくれるだろう。

それにしても、また雨が降っている。

でもいつか、この窓から大きな虹が見える、そんな気がしてならない。



近松賞 南 理維

盂蘭盆には抜けるような青空が広がった。鯖江の旅籠「川嶋屋」の一人娘である輝は遅い朝餉を終えると、下ろした前髪を整え、朱塗りの櫛を髷に挿した。玄関先で赤い鼻緒の新しい草履に足を通して父の五兵衛を呼ぶ。

「お父、早う」

何日も前からせがんで、誠照寺の縁日に出かける約束を取り付けていたのだ。

「そんなに急がんでも縁日は逃げんぞ」

団扇を片手に奥から現れた五兵衛に輝は、

「早う行きたい」

と、もどかしそうに地団太を踏んだ。見送りに出てきた祖母のお初も溜息をつく。

「まったく十四にもなつて幼いこと。あと二年もしたら婿を取らななんのに」

五兵衛は上がり框で愛娘に笑いかける。

「おろしたての草履やないか。そんない履物を履いてる子はこの辺じゃお輝だけやぞ」

「だって、お父が買ってくれた」

輝は草履の先端を軽く地面に打ち付けた。

「あれ、子どもにそんな贅沢させて」

非難がましく言うお初を尻目に、輝は五兵衛の腕を取り、旅籠を飛び出した。

二人が日野川に差しかった頃、輝の足取りが遅れ気味になった。先を歩く五兵衛が振り返る。

「腹でも痛いのか？」

「鼻緒で指が擦れて……」

輝が顔をしかめる。五兵衛が輝の足元を見ると、親指の股が擦りむけて血が滲んでいた。輝がべそをかき、五兵衛が途方に暮れていると、頭に手拭いを巻き肩に柳行李を担いだ十七八の若者が通りかかり、五兵衛に尋ねた。

「どうぞされましたか？」

輝は咄嗟に父の陰に隠れた。旅籠で働く男衆より一段と若く、目元の涼やかな男だった。

「鼻緒で足の指が擦りむけて歩けなくなっちゃったんだ。誠照寺さんへ行く途中なんだが」

「嬢さん、ちょっとその石に座るときな」

輝は頷いて素直に側の大石に座った。若者は頭の手拭いを取って齒で噛んで端を細く割き、器用に輝の足の親指に巻いてくれた。

「ほい一丁上り。痛ないか、歩いてみな」

爪先で動く細い指に気を取られていた輝はふと我に返り、草履を履いて恐る恐る歩を進めた。次の瞬間、満面の笑みを浮かべる。

「痛ないわ。歩けます」

「そうか、そりゃあ良かったな」

若者は白い歯を覗かせて笑い、

「俺、漆職人の弥助っていうんだ。誠照寺さんの門前で店を出すから、寄ってってくれよ」

「ご親切にどうも……」

弥助は五兵衛の言葉を最後まで聞かず、

「いけねえ、遅れたら兄さんに大目玉や」

柳行李を担いで走り出した。

「なんとせっかちな野郎だな。まあ、行先は同じようだから、お礼は会うたときにでも」

と五兵衛は輝を急き立てて歩き出す。輝は頬を染め、弥助の後ろ姿を目で追っていた。

誠照寺の壮麗な裝飾が施された四足門をくぐると、盂蘭盆の読経が聞こえてきた。境内はセンダンの木が青々と葉を広げて心地よい日陰を作り、人々が三々五々参拝している。輝と五兵衛もお参りを済ませて道に出ると、両側に参拝客目当ての出店が並んでいた。

「田楽でも食べていこう」

二、三軒、軒を並べて飯屋があつた。山椒味噌をかけた田楽と、油桐の葉にくるんだ葉寿司を向かい合わせて頬ばる。

「美味しい！」

「ほうか、うまいか」

「ええ、川嶋屋のご飯よりもうんと美味しい」

輝の言葉に五兵衛は苦笑する。夢中になつて田楽を食べ、顔を上げた輝の眼に、五兵衛の横に立つ若い女が映つた。襟を大きく開けた、色の白い女だ。五兵衛は咳払いをして、

「知り合いの御新造さんや。ちょっと大事な話があるから、お前は縁日の店を見ておいで」

と輝の手に小銭を握らせた。

「夕方、この店の前で待ってるんやで」

そう言うのと五兵衛は飯代を置いて出口へ向つた。女も切れ長の眼を艶っぽく流して輝に会釈し、五兵衛の後を追う。一人残された輝は手の中の二枚の四文銭を弄んでいたが、急にえ

も言われぬ不安にかられた。

「お父、待つて」

急いで店を出るが、五兵衛と女の姿は既にない。そこへ輝の横を数人の男が走り抜けた。

「スリや！」「あっちへ行ったぞ！」

一人の男の腕が当たって転んだ弾みで輝の髪に差した櫛が抜け落ち、男たちに踏まれて折れてしまった。石畳に膝を突いた輝に差し出された手。顔を上げると弥助が立っていた。

「大丈夫か？ 乱暴な奴らやな」

弥助は輝を助け起こし、土をはたいてやる。

「だ、大丈夫です」

慌てて視線を逸らす輝。弥助は輝の足の指に巻かれた手拭いを見て

「川で会ったお嬢ちゃんやないか」

と笑い、折れた櫛を拾い上げる。

「あゝあ、上等の塗りの櫛が折れちゃったで」

「あ、お母の…」

「おっかさんの櫛、挿してきたのかい？」

輝は涙を滲ませながら懷から懷紙を取り出し、折れた櫛を大事そうに包んだ。

「お母の形見なの。大事にしてたのに」

「ふうん」

弥助は輝と櫛を交互に見やった。

「俺にも田舎にお嬢ちゃんくらの妹がいるんだよ。この櫛、少々見栄えは悪くなるかもしれないけど、直してやろうか」

「まあ、本当に？」

「俺、越前漆器の絵付けの修業してるんや。今日は兄さんと小間物を商いに來てるのさ」

弥助は輝から櫛を受け取り、懷に入れた。

「それより、お嬢ちゃんならもっと年相応の可愛らしいのが似合うんじゃないかな？」

輝は弥助に連れられて小間物屋の出店に向かった。店の一角を占める簪台には色とりどりの簪が競うように並んでいる。弥助は簪に見とれる輝の顔を見ながら、赤い花飾りが揺れる一本を選び出し、髪に差してやった。

「お、似合うてるぞ。こういう縁日じゃ高価な品なんて売ってねえけどよ、若いうちは安物でも十分引き立つてことだ」

簪台の陰から兄貴分の職人が睨んだ。

「安物で悪かったな。弥助、いつまで油売ってるんや。日が暮れてまうで」

「すいません、兄さん」

兄貴分に隠れて舌を出す弥助に、輝は恐る恐る五兵衛からもらった小銭を見せた。値札には『二十五文』とある。

「あの…、私これしか持っていないです」

「八文でいいよ。これ、実は俺が塗ったんだ。また半人前やで、値もあつてねえようなもんなんやさ。名前は？」

「あ、ありがとう。輝です」

「お輝ちゃんか。可愛い名前やな」

兄貴分に代金を手渡す弥助の横で、輝は備え付けの鏡を覗き込み、髪に揺れる赤い簪を眺める。兄貴分は弥助の頭を小突いて言った。

「弥助、そろそろ店仕舞いやが、今日はよく働いたから少し遊んでいてもいいで」

弥助の顔が輝いた。

「兄さん、おおきに」

弥助は輝の手を取り、彼方を指差した。

「お輝ちゃん、あっちを見てみんか？」

夢見心地の輝に大道芸人の声が響いてきた。

「さて、さて、さては南京玉すだれ」

芸人は、輝に向ってさっとすだれを伸ばす。

「しだれ柳にちよいと似たり」。

声を立て笑う輝に弥助もつられて微笑んだ。

小半刻経ち、人もまばらになりつつあった。輝と弥助は門前の石段に座って甘酒を飲んでいった。輝ははにかんで弥助に言った。

「弥助さんにはいい人いるの？」

「いい人？」

「一緒になろうって約束してる人のことよ」

弥助ははぐらかすように空を見る。

「お輝ちゃんにはいるのか？」

「いない。私、十六になったらお婿さんをもらって旅籠を継がなあかんの。子どもの頃から跡取り娘、跡取り娘って育てられて」

「親御さんもそれを望んでるんやろう？」

顔を覗き込まれ、輝は真つ赤になった。

「でも私は女中や男衆を指図して旅籠を切り盛りするよりも、弥助さんみたいな職人さんの奥さんになって家のことだけしていたい」

弥助はからかうように、輝の髪に挿した簪を揺らした。

「俺にはいい人、いるよ」

「え？」

「俺、あと何年か修行したら漆職人として一本立ちできるんや。そしたら、田舎から親の決めた娘を呼んで……」

弥助の言葉を輝は遮った。

「弥助さんはその人が好きなの？」

「ああ、小さい頃から知ってる。いい子だよ」

唐突に輝は立ち上がり、走り出した。

「お輝ちゃん……」

弥助の声を後に駆け抜けた先には、娘を捜す五兵衛の心配そうな顔があった。輝は五兵衛に抱き付き、「お父、お父」と泣きじゃくった。五兵衛は訳が分からず、ばつが悪そうな顔で泣き続ける娘の背中を撫でてやった。

誠照寺の縁日からほどなくして、輝は初潮を迎えた。お初は喜んで輝の前髪を上げ、大人っぽく結い上げてくれた。輝は鏡に映った自分の顔を見て、弥助の簪を挿してみた。

「お輝嬢さん、さっき、若い職人さんが」

旅籠の女中が入ってきて、赤い袱紗に包まれたものを手渡した。袱紗を開くと、見事に修理が施された越前塗りの櫛が現れる。はっとして櫛を手に表に飛び出したが既に想う人の姿はなく、辺りを見回す輝の眼に、髪に揺れる簪の紅が灯のように宿っていた。(了)

小さな「飯ちゃわんに、色のあせたお椀。青い銘々皿に、箸。ふう、と溜息を吐いて、それだけの洗いものを流しに運んだ。

ひとりぶんの洗いものは、ふたりの時よりも不思議と何倍もおくうだった。とつとと済ませてしまおうと袖をまくりあげた途端、パチン、と耳元で音がした。

ずるずると、眼鏡が鼻からずり落ちてくる。

「あら、あらあら、まあまあ」

押えようとするが間に合わず、ぼちゃんと音を立てて洗いおけに落ちる。視界が、薄灰色に滲んだ。

ぎゅうつと眉を寄せて、目をすがめる。

誰かが見ていたら、まさに梅干しばあちゃんだと笑うだろう。流しに屈み込んでどうにか見つけた眼鏡は、赤いお椀に引っかってふかふかと浮いていた。

拾い上げてみると、ぼろりと右のツルが外れる。無残に分解してしまった眼鏡に、ここ数年

でめつきり増えた独り言が零れた。

「あらあら。直しにいかなきゃいけませんねえ」

夫に先立たれてから、もう五年が過ぎた。なのに呟く言葉は、いつまでたってもあの人に話しかけると同じ調子になった。

確か、もうひとつ眼鏡が茶筴筥にしまつてあつたはずだ。かなり古いが、眼鏡屋さんに行く間くらいの役には立つだろう。ついでに買い物に行つてしようと、手についた泡を洗い流した。

春の終わりの埃っぽい風の中、痛む腰と膝をだましだまし、よちよちと道路を歩く。

おぼつかない足取りを支えてくれるシルバーカーを押していると、他人さまのご迷惑になつていやしないかと少しだけ気を兼ねる。だけど、重たい牛乳や、かさばるトイレットペーパーを運んでくれるこれは、散歩や買い物の欠かせない道連れだった。

水道管でも交換しているのか、駅前までの道はアスファルトを剥がされ、長方形の大きな穴が空いていた。

警備員さんに会釈をして、脇を通らせてもらう。砂利混じりの土の上を転がった車輪が、でこぼこ道に文句を言うようにごごとと鳴った。

駅を通り過ぎ、小さなアーケードに入る。眼鏡屋の前で立ち止まると、シュッと自動ドアが開いた。

何十年も同じポスターを貼っていた古い眼鏡屋さんが、木をふんだんに使ったお洒落なお店になったのは三年ほど前のことだ。

ぎゅゅつと眉を寄せないと読めないほど小さな文字で店名が書かれた臙脂色の看板に、無垢木の壁。若い人向けのお洋服屋さんのような外見に、ちょっとだけ怯む。けれど、昔と変わらぬ正面左の一隅に、それらは並んでいた。

鯖江の眼鏡。小さなプレートを見ると、口元が緩んだ。

いつでも少し怒っているようだった、早口の声を思い出す。

もう十年近くも前のことだ。

あら、今日は誕生日だわ。買い物の中で取り出したポイントカードに呟くと、なんの気まぐれかあの人はプレゼントを買ってやると言い出した。

だけど、ただでさえせっかちな夫が、お洋服なんて選ぶ間を待てるわけがない。ケーキなんて買ったら、糖尿に悪い。じゃあお花、と思いかけた時、目の前にあったのがこの眼鏡屋さんだ

った。

「使わないもん買つてもしょうがないしな。眼鏡なら使うだろ」

独り決めて、とっとと入つて行つてしまつた背中を追う。

そこのお店には、ごちゃごちゃとした白と透明のプラスチックの台が並び、レジの後ろには黄ばんだ視力検査のポスターが貼つてあつた。

「どうせなら、ちゃんと測つてもらえよ」

ええ、と頷いて台を見回す。せうかくなら、気に入つたフレームを選びたい。端から棚を見ていこうとする私に、あの人は苛立つたような声を上げた。

「国産にしとけよ。国産に」

メーカーで長く働いてきたせいか、できるだけ国産品を使う、というのがあの人のこだわりだつた。そうして、一つのを長く使つては、なかなか壊れないな、やっぱり国産だからな、とまるで自分の手柄のように自慢げに言う。

国産かどうかなんて見てわかるのかしら、と視線を巡らせたところにあつたのが、鯖江の眼鏡、という小さなプレートだつた。

そこに並んでいるフレームはいえ、ツルが何本もの細い金属を重ねて作られていたり、金属の合間にまるでステンドグラスのように色とりどりに透ける板が嵌め込まれていたり、

ずいぶんとお洒落なものだった。

「あなた、これ見てくださいな。福井の眼鏡屋さんなんですって」

明治から始まったという眼鏡づくりを紹介する小さなパンフレットを広げて差し出すと、ちらりと目を走らせたあの人は小鼻を膨らませてフンと息を吐き出した。

お気に召した、というサインに、台の上を眺める。

蝶が羽を広げたような形に複雑に金属を編んだもの。これで折れないかと心配になるほど細く軽いもの。赤のふちに黒のツルなんて、冒険的なデザインのものもあった。

「あらまあ、どれがいいかしら」

選びかねて呟くと、骨ばった指が一つを指した。

「これでいいだろ」

そこにあつたのは、天の川のように幾筋も重なる金属がツルになっている、明るいピンクの眼鏡だった。

すぐに苛々するし、洒落っ気なんて少しもない。スーパードって買おうと決めたものをまっしぐらにカゴに入れないと我慢できなくて、何にしようかしら、なんてうろうろするのは許してくれない。

だけど、いくつになつたって嫁にはピンクが似合うのだと疑いもなく思っている。そんな人だ

った。

「はい、いらっしゃい」

声をかけられて、ふっと夢想から立ち戻った。

年季の入った白衣に、すがすがしく光る頭頂部。声をかけてきたのは、お父さんのほうの主だった。ほっと息をつく。若い人と話するのは、時に楽しいがくたびれもする。年の近い相手のほうが、気が楽だった。

眼鏡ケースを取り出すと、レジの前の椅子を勧められた。

「はいはい、どうしましたかね」

細い金属フレームの眼鏡をついと押し上げる前にケースを開けて見せると、壊れた眼鏡を持ち上げた店主は感心とあきれが入り混じった声を上げた。

「こりゃまた年季が入ってるねえ。ハゲチャビンだ」

ピンク色の塗装がところどころはげてしまったフレームに目を落として、頷く。

「そうなの。直るかしら」

目から離してみたり、近くしてみたり、角度を変えては眼鏡を覗き込んで見ていた店主は、

ついと掌を差し出すと外れたソルの繋ぎ目をちよんちよんとついて見せた。

「ネジが取れちまったんだな。直すこたできるが、もういい加減ポンコツになつてゐるからな。買い直したほうがいいと思うけどねえ」

しみじみとした声に、首を振る。新しいものを買う気は、すこしもなかった。

「いまさら買つてもねえ。いつお迎えがくるかもわからない」

「はっはっは！ ま、それなら直してみようか」

朗らかな笑い声が響く。この年になつてゐる寿命の話は、どこかすこんと乾いていた。

だつて、会いたい人の多くは、もう空の向こうにいる。

皺深い指先が、慣れきつた動きで眼鏡を直していく。目をすがめて小さなねじを確かめ、ねじ回しで止める。布で包んで持ち、あちこちの歪みを整える。

一度かけてみて、耳の高さや鼻の当たり具合を確かめる。もう一度直してもらつた眼鏡は、顔にしっかりと馴染んだ。

「これでいいわ」

店主が、得意げに口の端を引き上げた。

一度外した眼鏡は、すぐさまちっちなお風呂のような機械に沈められた。ぶくぶくと細かな泡を立てる水に浸かった姿が、なんだか満足げに見える。

取り出された眼鏡は、いかにもさっぱりしたというように、ハゲチャビンでもびかびかと輝いていた。

最後に、きめの細かい布できゅっきゅ、と磨かれたツルを耳にかける。ぱっと、目の前が明るくなった。

「ああ、よく見える。やっぱりこれじゃなきゃねえ」

「たたむ時はね、そっとお願いしますよ。もうコイツもだいぶ頑張ってるんでねえ」

まるで働きづめの友人を労うような言葉に、頷いた。

お金を払おうとしたら、首を振られた。しかし、タダというのはちよつと気が引ける。レジ横に可愛い猫柄の眼鏡拭きを見つけてクリーナーと一緒に差し出すと、店主は少し笑ってレジを打った。

シルバーカーを押して、ゆっくりと歩く。

目の前が明るい。それだけで、ずいぶんと素敵な場所にいるように思えた。

きれいにしてもらったせいか、いつもは掛けていることさえ気づかないくらい体温に馴染んでいる眼鏡が、少しだけひんやりとしていた。

ちゃんと鼻の上に乗った存在に、気持ちを向ける。あの日からずっと、この子は私といたのだ。悲しみも、諦めも、希望も、ぜんぶ一緒に味わって。

私もいい加減ポンコツだけど、もうちょっとだけ一緒にいましょうよ。せつかなんだし、ねえ。

胸の中で呼びかける。

きつと、私の息が止まるまではこの子も頑張ってくれる。なんせ、国産なんだから。

さつきまで大穴を空けていた道路は、あつというまに塞がれ、アスファルトを敷き直されていた。なめらかな路面に、シルバーカーがカラコロとご機嫌な音を立てる。

ぼんと高く突き抜けたように青い空からは、少しだけオレンジ色を増した午後の光が降り注いでいた。

大阪駅発金沢行きサンダーバード十一号に乗車した。平日のしかも六月とあって、指定席は問題なく取ることができた。座席の占有率は六割ほど。二席ある座席のもう一席にバッグを置き、発車する前に駅で購入した弁当を食べた。缶ビールも思ったが、鯖江までの時間は意外と短い。相手の心証を悪くしては元も子もない。そう思い、ペットボトルのお茶で我慢した。

次の停車駅、新大阪駅で乗車客が急が増え、慌ててバッグを網棚に載せた。

「失礼します」

丁寧な挨拶をして隣席に女性が座った。年の頃は三十前後か、三十三歳の私よりいくぶん年下に見えるその女性は、紙バッグの荷物を足元に置くと身じろぎもせず座っていた。

「よかったですらお荷物、網棚へ載せましょうか」

見かねた私が尋ねると、女性は一瞬躊躇したものの、

「申し訳ありません。お願いします」

と言って紙バッグを私に手渡した。

網棚に紙バッグを載せ終えると、女性は、

「よかったですか？」

と小さな包みを私にくれた。包みを開けると、「たねや」のどら焼きだった。

「好物なんです。ありがとうございます」

お礼を言うと、女性は笑って、どら焼きを頬張った。

「父への土産なんです。私も好きなので余分に買いました」

それがきっかけになり、女性と話すようになった。

「どちらまで行かれるのですか？」

尋ねると、女性は思いがけず鯖江市という言葉を口にした。

「奇遇ですね。私も鯖江に行きます」

「大阪の方でしょ。鯖江にどなたかお知り合いがおられるのですか？」

すぐに返事ができなかった。しかし、旅の恥はかき捨てという言葉もある。何よりもその時の私は誰かに話を聞いて欲しかった。

「恋人だった女性がいます」

「——だったというのは……」

「ふられました。その女性は私を振って鯖江の実家に帰りました」

「すみません。変なことをお聞きして——」

申し訳なさそうに頭を下げる女性の長い黒髪を見て、私はまた、晴香のことを思い出した。
「いえ、いいんです」

列車は京都駅に到着した。車内は一瞬騒然としたものの、すぐに鎮まり、アナウンスが流れて静かに発車した。

「七年間、交際しました。とても仲がよかったのですよ。でも、おかしいものですね。七年も付き合うと、夫婦のような関係になつてしまい、ときめきもなく、愛することすら怠惰になつてしまいます。別れは簡単なものでした。鯖江の実家からお見合いの話が来て、その時、彼女は私に相談しました。どうしようかって——」

列車は堅田駅に近づいていた。それを伝えるアナウンスが流れた。

「どう対応されたのですか？」

女性が聞いた。

「勝手にしたら、と答えたのです。本当は、迷うな、おれと結婚するんだろと言いたかったのです。でも、言えなかった」

「男のプライドですか？」

「いえ、違います。多分、その時は、どうでもいい、やけっぱちになっていたのだと思います。彼女を七年も放っておいたのは、すべて私自身の問題です。弁護士になるための司法試験に何度も失敗して、今年こそと思いつながら、また失敗して、そんな自分が嫌になっていました。これ以上、彼女を待たせるわけにはいかない、そんな気持ちもあつたと思います。だから彼女にそんな言葉を吐いたのでしょ」

琵琶湖の湖面が陽の光を受けて輝いている。見ず知らずの人に私はなんて話をしているのだろう、そう思いかけた頃、彼女がつぶやくようにして言った。

「私もそうです」

聞き取れるかどうか、わからないような声で彼女が言った。

「え？」

「私もあなたと同じです」

「どういうことですか？」

「私の彼は作家志望でした。今年こそ賞を取る。そう言って私に夢を見させてくれました。でも、現実には厳しくて、賞を取るどころか、佳作にも引かかれません。彼はいろんな仕事をして、夢を追いかける努力をしました。私はそんな彼といることが幸せでした。でも、実家から見合いをしよう催促が来て、とうとうそれに逆らえなくなりました。あなたと同じように私も

彼に相談しました。彼は、何も言わず、ただ一言、いい機会じゃないかと――」

近江今津を過ぎた。いい天気が続いている。青空が車窓の向こうに広がっていた。

「今日、鯖江に帰ることを彼に伝えましたか？」

「いえ、伝えていません。彼はもう私には関心がないのかも知れませんから――」

「彼の夢は、あなたの夢でもあったのじゃないですか？」

「えっ……」

「二人で築いてきた夢ですよ。後悔はありませんか」

「……」

「私も同じです。彼女の幸せを思って、身を退こうと思いましたが。でも、無責任だなと思い直しました。私が弁護士になるという夢は、私一人の夢ではなかったはずだと気づいたのです。彼女の夢でもあったのだと――。だから鯖江に迎えに行こうと思いましたが。それが今日です」

列車の走行音が心地よく響き、窓外に田畑が広がる。その向こうは小高い山の連続だ。

「私も同じです。後悔があります。あなたのおっしゃるように、彼の夢は私の夢でもありません。今もそれは変わりません。でも、もう駄目です」

「どうですか？　もう一度彼の気持ちを確かめてからでも遅くないと思います」

彼女は小さく首を振り、噛み締めるように言葉を吐いた。

「私の父は、鯖江市で若い頃から眼鏡の製造に関わっています。職人氣質の人ですから仕事に厳しく、人にも厳しいところがあります。一度言い出したら後には引きません」

鯖江市は、眼鏡フレームの生産では日本市場の80%を誇ると、彼女から聞いたことがあった。見も知らぬ彼女の父がなぜか思い浮かんだ。それは自分の場合も同様ではないかと思っただけだ。

「実家に帰れば、すぐに見合いが待っています。父と同じ職場の人のようです。実直で仕事熱心な人だと父から聞きました。でも私は素直に応じることができません。彼のことがまだ、頭から離れなくて——」

彼女の目から涙の粒が一粒、二粒こぼれおちた。窓外から差し込む日の光がその涙の粒を照らし出す。彼女の悔恨の情が涙に集約されているかのように見えた。

「桜町に私の彼女の実家があります。近くに西山公園があり、四季の花々が美しい名所だと聞いています。その町のその家を訪ね、今度こそ私は、彼女にプロポーズするつもりです。そして正式に相手の家族に結婚の許しを得るよう努力します」

「もし、彼女の気が変わっていたらとは考えないのですか？」

敦賀を過ぎた。鯖江まで二駅だ。私はふっと小さな吐息を漏らして彼女に答えた。

「懸命に、恥も外聞もなく説得します。今度こそ大好きだと心の底から叫びます」

彼女は私の表情を盗み見て、「お強いのですね」と言った。

「強くありません。弱いから彼女は私の元を離れたのです。でも、別れて気づきました。彼女の存在の大きさを、そして愛を——」

一呼吸おいて、私は彼女に宣言した。

「だから強くなります。そして戦います。彼女の両親と、彼女とも」

彼女が笑った。笑って言った。

「素敵です。とても素敵ですよ。そんなふうに愛してもらえたらどんなに幸せか——。私の彼にもあなたのような覚悟があればいいのですが、元来、気の弱い人ですから、とても無理でしょうね」

鯖江駅が近づいていた。車内アナウンスが「次の停車駅は鯖江駅」とリズミカルな口調でアナウンスした。

「西山公園は私も大好きな鯖江の名所です。どうか頑張ってください。うまく行くようお祈りしています」

鯖江のホームが近づいた。彼女のために網棚から紙バッグを下ろそうとした時、私は不意に気が付いた。

「あの人——ヘルメットを抱えてホームに立っている人、もしかしたらあなたの彼ではありま

せんか？」

席を立ちかけた彼女が私の指さす方向を見る。ヘルメットを手にホームに立ち、ぼんやりと列車を眺めている男性がいた。

「――！」

彼女が声にならない声を上げた。

「違いましたか？」

大きく首を振った彼女は、今にも泣き出さんばかりに私を見て言った。

「彼です。私の大好きな彼です」

駆けださんばかりにホームに降り立った彼女は、一目散に彼に向かって走って行った。

多分、夜のうちにオートバイを走らせ、朝からこのホームで彼女が降り立つのを待っていたのだろう。ホームの片隅で抱き合う二人を目にして、私は思い切り泣いた。

よかった。次は私の番だ。

改札を出て、空を見上げた。コバルトブルーに染まった鯖江の空が眩しかった。

(了)

初めて「走れメロス」を読んだ時、私は、その第一行目に強烈な違和感を覚えた。

「メロスは激怒した」という有名なあれ。

え、ちょっと待って。何であんた、いきなりそんなに怒ってるの？ キレやすいタイプなの？
とりあえず落ち着きなよ。

私がメロスの側にいたら、そう言ってなだめてあげたのに。そうしたら、メロスはあんなに走らされること、なかったし。

でも、それからだいぶ時間が過ぎて、大人と呼ばれる年齢になった今の私には、メロスの気持ちがよくわかる。

メロスはいきなり激怒したわけじゃない。それまでにたくさん、我慢に我慢を重ねて、その我慢が、心のコップからとうとう溢れてしまっただけなのだ。

きっと、メロスは寂しかったんだろうな。我慢に気付いてもらえなくて、もう最後の手段として、実力行使に打って出たんだよね。

わかるよ、メロス。私には、わかるよ。

……というようなことを、私は、荒い息づかいで、スマホを握りしめたまま、ぼんやりと考えていた。

要約すると、私は今、電話の向こうの相手に激怒していたのだ。

電話の相手は、恋人であるヒロトだった。

「ごめん。本当にごめん」

少しの沈黙の後、ヒロトがまた謝った。

「会えないってどういうこと？」

「だから、本当にすまないと思っている」

「そんなジャックバウワーみたいなセリフ、聞いてない。何でデート出来ないの？」

「今、大事なプロジェクトが佳境なんだよ」

「だって、この前も、その前も、ドタキャンだったんだよ？」

「仕方ないだろ、仕事なんだから」

堂々巡り。先週と先々週と同じ会話を、また繰り返している私たちがいる。

あれ？　もしかして私たち、タイムリープしてる？　何だか笑えて来た。

ヒロトとは、大学時代からの付き合いだ。あの頃は、一緒にいることが日常だった。一緒に授業に出て、カラオケに行つて、互いのアパートに泊まり合つて、恥ずかしい言葉をいっばいささやき合うのが、日常だった。

今は違う。二人とも勤め人になって、ヒロトは東京から離れた地方都市に配属になって、一緒にいないことが日常になってしまった。

せめて誕生日くらいは、私の一年に一度の特別な日くらいは、一緒にいたかったのに。上司をぶん殴つてでも有給取つて来るつて、あんなに言つてたのに。

「あ、でも。俺、もう買つてあるから」

突然、明るいトーンで話し出したヒロトに私は戸惑つた。

「眼鏡だよ。ほら、カナがすごく欲しいって言つてた例のやつ。銀座で買ったから？」

「え、いつ買ったの？」

眼鏡。私が誕生日プレゼントにリクエストしていた、鯖江の高級ブランド眼鏡。

「三日前。俺、何とか時間作つて、銀座まで買いに行つたんだぜ。偉いだろ？」

「……何で、私に連絡しないの？ どうして私と一緒に買いに行かないの？」

「だって平日の昼だよ。カナ、仕事だろ？」

頭がクラクラして来た。

「こういうのはサプライズでプレゼントした方がいいだろう？ 明日にでも、カナの家に宅配便で送るよ」

「え、宅配便？」

「そう。早く掛けたいだろ、眼鏡」

「いない」

ヒロトの言葉が終わるより早く、言った。

「何だよ。あんなに欲しがってのに」

「ごめんね。もう欲しくなくなっちゃった」

「何だよそれ。勝手なやつだな」

ヒロトの小さな舌打ちが聞こえた。

「そう。勝手なの私。じゃあね」

通話を切った。スマホを壁に投げつけたくなるのを、かろうじてこらえた。

私たちはいつからこんなに、すれちがうようになってしまったのだろう。

重い溜息で、部屋が灰色に包まれる。季節はもう秋なのに、やたらと蒸し暑く感じた。

私の誕生日になった。

結局、私たちはお互いの家でリモートパーティーを開くことになった。物足りないけれど、会えないよりはマシだ。

仕事を終え、ワインとケーキを一人分買って帰宅した。ヒロトにメッセージを送る。

「うちは準備OK。お仕事頑張ってね」

撮り溜めてあったバラエティー番組を適当に流し見しながら、ヒロトを待った。

約束の時間になった。ヒロトから連絡はない。スマホを覗く。さっきの私のメッセージに既読は付いていない。

三十分が過ぎた。連絡はまだない。既読も相変わらず、付いていない。私は読みかけの文庫本に手を伸ばした。待つしかない。

一時間が過ぎた。文庫本を読み終わった。期待していたよりもつまらない結末だった。既読はまだ付かない。でも、待つしかない。

一時間半が過ぎた。動画投稿サイトで、柴犬が飼い主とたわむれるだけのチャンネルをひたすら見続けた。犬を飼いたくなった。

二時間が過ぎた。涙がこぼれて来た。

私、何やってるんだろう？ 誕生日に一人ぼっちで、ぬるくなったワインと乾いたケーキを並べて、何を待ち続けているんだろう？

誕生日に、こんなに悲しい思いをさせるなんて、あきれた彼氏だ。許しておけぬ。

私は衝動的に家を飛び出し、最寄り駅へと走った。待ち続けるのはもう限界だった。

在来線と急行列車を乗り継いで、揺られること一時間半。私は、ヒロトの住む町までやって来た。やって来てしまった。

もうとくにシャッターが閉まっている商店街を抜けて、以前来た時の記憶を頼りに、ヒロトのアパートへ向かった。

小雨が降って来た。コンビニ前に怖そうなおにisanたちがたむろしていた。ヒロトに早く会いたかった。気が付いたら、私はサンダル履きなのに小走りになっていた。

ヒロトの部屋のドア前に立ち、インターホンを押す。指先が少し震えた。しばらく待ったが、何の反応もなかった。

合鍵を取り出し、中に入った。真っ暗だった。ヒロトがいないことは一目瞭然だった。そもそも、はじめからヒロトなんていう人間はいなかったんじゃないかと思うくらい、室内はシンと静まり返っていた。

いくら仕事が忙しかったって、こんな遅い時間に帰って来ないなんて、あり得ない。一本の連絡も寄越さないなんて、あり得ない。

浮気だな。そう思った。これはもう、浮気で確定だ。私じゃない誰かの家で、今頃、新しい日

常を過すごしているんだ。

泣けて来た。自分がみじめで、バカみたいで、どうしようもないほど泣けて来た。

その時、ポケットの中でスマホが鳴った。弾かれたように取り出した。ヒロトだった。

「もしもし、カナ、今どこにいるんだ？」

ヒロトの声が、耳から全身に熱く流れ込んで来る。嬉しさとか怒りとか悲しさとか、いろんな感情が一気に押し寄せて来て、私は少しめまいがした。

「ヒロト」そ、今、どこにいるの？」

「カナの家だよ」

「……え？ 何で、どういうこと？」

「家に来たら、ワインもケーキも出しっぱなしで、電気も付いたままで、カナだけいないから、何かあったのかと思って、本当に心配したんだぞ」

「どうして？ どうして私のうちにいるの？」

「……サブライズ」

「サブライズ？」

「カナを驚かせたくて、わざと連絡しないで来たんだ。やっぱり、誕生日くらいはカナと一緒にいたいから」

泣けて来た。涙が止まらない。さっき流した涙とは、全然、別の涙。

「ヒロト、私を殴れ！」

「は？」

「私、疑った。ヒロトが浮気してるんじゃないかって。だから、私を思いきり殴れ！」

「カナ。とりあえず落ち着いてくれ」

バカだ。私はバカだ。ヒロトの気持ちも知らず、一人で勝手に暴走していた。でも、ヒロトはもつとバカだ。何がサプライズだよ。私が欲しいのはサプライズなんかじゃないのに。どうして私たちはこんなにすれちがってるんだよ。ヒロトのバカ。

「つて言うか、カナは今どこにいるんだ？」

「ヒロトの家」

「はあ？ 何だよ？」

「……サプライズ」

「ごめん、意味がわからない」

「今すぐ帰るから、そこで待ってて！」

電話を切って、マンションを飛び出した。

雨が強くなっている。傘はない。早く駅まで戻ろう。急げば、ぎりぎり終電に間に合うかも

知れない。私は走り出した。サンダルの踵がカンカンカーンと宵闇に響いた。

会いたい。早く、ヒロトに会いたい。

会いたい、会いたい、会いたい。

「走れ、カナ！」

私は心の中で自分を鼓舞しながら、メロスの三倍くらいのスピードで、雨の夜の商店街を駆け抜けた。

【了】

目を覚ますと、世界は一変していた。

「神谷隼人さん、驚かないでね」

ベッドに横たわる僕に、白衣に眼鏡姿の女性医師が優しく語りかけてきた。

「あなたは事故で、二十年、昏睡状態だったの」

信じられない事実は、手鏡の中の自分を見て、理解した。見知らぬおじさんが見つめ返していたから。計算上、三十八歳ということになる。中身は高校生のままなのに。

「あの……お父さんとお母さんは？」

「一度もお見舞いに来てないわね」

「……僕の家はあるんですか？」

それもやはり分からなかった。僕は管理センターという施設に送られ、外の世界を見ることはできなかった。

「あんたか。噂の眠り王子ってのは」

部屋は二段ベッドが並ぶ四人部屋。その一人、タケさんというインテリが新入りの僕にいろいろ教えてくれた。

「ここは施設とは名ばかりの監獄さ」

たしかに鍵は外から掛けられる仕様になっていた。外出の許可は下りず、室内に居続けない。

隊服姿の女性管理官たち。皆、女性ばかりで男性の姿はなかった。

「あんたが熟睡中に世界はひっくり返ったんだ。女がすべてを主導する。政治、経済、教育、警察、そして軍隊も」

そんなことが可能なのか？

「十年くらい前かな。女性活躍党って団体が現れて、一気に政権を握った」

今まで偉そうにしていた男たちはみんな、罪に問われて罰せられたそうだ。歯向かう者は男も女も容赦しない。弾圧の連続だったと。

「そういう法律が決まったんだよ。男子管理法。俺たちはもはや女に逆らえない。全部、大統領のせいだ」

日本初の大統領。もちろん女性だ。

そんな彼女たちが男性を支配する。労働力として。時には娯楽の対象、時には子孫繁栄の

道具として。賃金は支払われず、用済みになれば使い捨てだ。

きつとこれは夢に違いない。けれども、一向に目覚める気配はなかった。

僕は他の収容者たちと同様、過酷な肉体労働の現場に駆り出された。命の危険にさらされる作業を朝から晩まで。

ある日、タケさんは体調を崩した。けれども、休むことを許されず、作業中にダウンしてしまった。女性管理官が力ずくで働かせようとするので割って入った。

「やめてください。酷すぎます」

僕は警棒で殴打され、気を失った。

窓のない独房の中で過ごすことになった。分厚い壁は外界の音を遮断し、明かりのない闇に囲まれていると、本当に悪夢の中にいるようだった。

一日一回の食事の時間が来た。ちょうど女性所長に直々に様子を見に来た。

「どうですか、反省はしていますか？」

穏やかな口調。廊下から漏れる照明が逆光になり、眼鏡をかけた表情は分からない。

「規則違反は懲罰を受ける。小学生でも分かりますよ」

「悪いことなんて、何もしていないじゃないですか……」

「我々、女性が受けてきた痛みに比べれば甘いものです。今度はあなたが苦しむ番」

「こんな人権問題です！」

「あなたたちに人権はありません」

その時、爆破音が響いてきた。部下の管理官が無線でやりとりをする。

「反乱軍が突入してきたそうです！」

女性所長と管理官たちは急いで出ていった。再び闇と沈黙が訪れる。

鉄扉が勢いよく爆破された。煙る中、武装した女性兵士が顔を覗かせた。

「神谷隼人、あなたを助けにきた」

どうして世界は分断され、争いが起きてしまうのだろう。

反乱軍、いや、彼女……リコと名乗る若い兵士によれば解放軍というのが正式名称で、僕は今、秘密基地にいた。

「私たちは政府のやり方を変えるため、こうして地下活動をしているの」

彼女たち兵士を見て、気づいた。裸眼がコンタクト。なのに、今まで接してきた管理側の女性たちは皆、眼鏡を掛けていた。大統領の出身地の特産品である眼鏡を携帯することを義務付けられたという。だから、眼鏡をしないことは解放を意味する。

「女性もレジスタンス側にいるなんて」

「いっぱいいるわよ。今、同志たちがトンネルを掘っていて、大統領官邸の真下に直結したとこ」

ろ。これから突撃するから、あなたも一緒に来て」

「何で僕が？」

「あなたのお母様に頼まれたの」

意外なところからお母さんの名前が出てきた。

「この解放軍の創設者。だけど反逆者として処刑された。お父様と一緒にね」

「親父も……」

お父さんは福井にある地方紙の新聞記者だった。そして、地元で近松を研究する文学者のお母さんと出会った。近松といえば、道ならぬ男女の恋か。

「お母様はいつもおっしやっていた。息子はいつか眠りから覚める。そして、この世界を変えてくれると」

「そんな！　僕は見た目はおじさんだけど、中身は平凡な高校生だよ」

「あなたならできる。だって、大統領を知っているでしょ？　高澤彩子よ」

その名前に、僕は衝撃を受けた。

「国民の皆さん！　極悪なテロリストに対し、このたび懸賞金を出す法案が成立しました。日本の平和を乱す者は断じて許しません。ぜひ、ご協力を！」

僕は今、タブレットのモニターには、女性大統領が眼鏡越しにカメラ視線で語りかけている

姿が映り、イヤホンを通じて声を聴いていた。

演説のライブ配信が終了すると、別の音声が目元に届いた。官邸の執務室に仕掛けられている盗聴マイクからだ。

「大統領、お疲れ様です」

女性補佐官らしい。大統領の返事が。

「本当に疲れた。最近、疑問に思うのだ。これが私の望む未来だったのかと」

僕の隣にいたリコが合図をした。突入だ。一緒に武器を持って続く。

解放軍が床下から一気に侵入し、官邸はパニックに陥った。銃弾が行き交う中、僕とリコは執務室へ到達した。

だが、リコが銃撃を浴びて、絶命した。女性大統領が撃ったのだ。

「男に味方する奴は惨めな死を迎えるのだ」

僕は彼女を見返した。

「高澤さん、ずいぶん老けたね。覚えてない？ 僕にとってはこの前のことだけど」

女性大統領、高澤彩子の顔色がさっと変わった。

「神谷……君？」

「あの日、何があったか思い出したよ」

高校の校舎、階段の踊り場、昼休み。僕は高澤さんと向かい合っていた。

「神谷君、私と付き合って！」

きりっとした顔立ち。乱れのない制服と髪型。眼鏡姿。

生徒会長であり、課外活動として市のJK課プロジェクトという女子高校生団体のリーダーも務めていた。優等生として、学内では高嶺の花だった。

「高澤さん、ごめん……無理かな」

「どうして？ 私、市長の娘よ。おじいちゃんは県会議員よ。名誉あることじゃない」

「そういうの、関係ないよ。じゃあ、授業があるから」

階段を降りようとした瞬間、背中を突き飛ばされた。僕は転げ落ち、激しく頭を打ちつけた。意識が薄れていく中、高澤さんの声が響いた。

「誰か、救急車！」

彼女は高校を卒業しても、JK課プロジェクトのOBをまとめ、市政、県政に関わり始めた。やがてJK党＝女性活躍党として、国政に進出した。

「高澤さんのプライドをずたずたにして本当にすまなかった」

僕は高澤さんの手を握りしめた。

「やめて！ 離して！」

「一緒にやり直そう！　お願いだ！」

「神谷君……信じていいの？」

世界を救うにはこれしかなかった。

銃声が響いた。

「高澤さん！」

揺すっても目を覚ましてくれない。政府軍が鎮圧して、僕は拘束された。

「大統領を撃つてタダですむと思うんですか？」

「男に魂を売る者は男子管理法のもと、処刑が許される。お前は管理センターに連れ戻す」

僕は心に誓った。みんなの死を無駄にはしない。いつかきつと和解できる日が来る。そのためにも、僕はあきらめない。

(了)

近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる…



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+
めぐり



きんぎょ
橋



ちちろもアキパワー情報

「苦を抜き、楽を与える」名号岩

●名号岩 (めいごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「南無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には救苦与楽の働きがあるとされ、通行する人々に唱えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

泰造大師の母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く泰造大師が子供の頃に母親が降り立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話 (KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を超えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

《この本の使い方》

近松にゆかりのある
パワースポットを、写真
と文章で紹介

訪れた記念に、
ちかもんくんスタンプ
を、押しましょう！
それぞれの場所に設置された
「近松の里めぐり物語
BOX」「近松の里めぐりBOX」
の中に、スタンプや情報誌
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」
「ひとやすみ」の3つに分
け、その場所ならではの
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松
門左衛門の幼少時代を振り返ります

さらに！応募してゲットしよう！

12
ポイント
ぐるっと
まわって
越前漆器製ご利益特製絵馬
をもろおう！

別紙の応募ハガキに12
カ所のスタンプを全部
集め、必要事項をご記入
の上50円切手を貼り
郵送してください。後日
「近松の里 たちまち パ
ワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくん
グッズを郵送いたします。開館日には、立待公民
館・まなべの館でも受け取ることができます。また、
Wチャンスとして毎年10月に開催される「たち
まち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前漆
器特製ご利益開運絵馬」をプレゼントいたします。

※詳しくは応募用紙をご覧ください。

恋話＝恋花 (KOIBANA)

恋愛を題材とした作品が多い近松門左衛門。
「近松の里 たちまち」をめぐり、各所で見かけた
花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を詠ん
だ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話を恋歌を
紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年
『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞
恋話を募集します。

【テーマ】

近松の恋愛が時を超えて
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)



近松パワーで恋愛成就・習い事上達

map ナンバー

1

近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんひていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



ここに
スタンプを
おしてね!

※この近松の里めぐり
物語BOXに
スタンプが
入っています。



サツキは「ツツジ」とも
言われていて呼び名です。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌親公」や、元禄三大文豪のひとり「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文豪の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかずお氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることができます。



七曲りで遊ぶ近松の人形



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、節制

恋話

KOI BANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、望帝の妻、更んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も愛しく懐き続けたい血が地上に落ち、そこから赤い花が咲き、杜鵑花と呼ばれたとされています。

※メッセージ「何事も度を越さないよう、控えめに」



水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

西光寺表門

さいこうじおもてもん



全国でも珍しく殿号と呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬医門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認めらることなど、当時の面影を残す希少なものと言えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



? なんだろう

「じゃぼんこう」の由来
江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行、献身的に世話をする。やがて、親鸞の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、徳望が高まるほど健康が気になりお通、ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の報恩講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が無い上がったという伝説から「報恩講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



大イチョウ

西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立待の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、銀杏拾いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「韓藍」(からあい)

花言葉: 色あやぬ恋、情愛、おしやれ

恋話
KOI RANA

「秋さらば 写もせむとわが蒔きし 韓藍の花を 誰か採みけむ」(与謝蕨村)
秋に染めようと思って蒔いた韓藍の花が、誰かに摘まれてしまった。韓藍の花は「思い人」を意味しています。

※メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

糺野お清水

ただすのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



ここに
スタンプを
おしてね！
その
近所の聖めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



水際に生じ、石に隙く
かわいい花。



? なんだろう



お清水を守る白不動明王

糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅びし、幸福を与える仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松との縁



水路脇に隠れるように 存在する糺野お清水

浅水川から西光寺前を流れる水路脇に、今は一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出ていたそうです。



パンジー(すみれ) 花言葉:物思い、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

恋話
KOH BANA

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつパンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇跡を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちを、花に託してみては」



人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

石田の渡し場跡

いしだのわたしばあと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用して「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三国湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道（越前海岸から吉江に至る街道）」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ひとやすみ



渡し場跡で往時を偲ぶ
現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見物らしのいい渡し場跡を眺め、往時を偲びましょう。



近松との縁



近松と幸若舞を繋いだ石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型と言われています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



ここに
スタンプを
おしてね!

この
近松の里めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



子どもの頃を思い出す
クローバーの花。



クローバー（シロツメクサ）

花言葉：約束、恥を忍び出してくたさい

恋話

KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにいくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に結び、沼に身を投げました。翌朝、その周りにはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちがいずれ違います」



難関突破! 遠回りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

吉江七曲り通り

よしえなまがりとおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して庭がありますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



近松が暮らした城下町

10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な舞踊風の文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力ぎ型の通りが現存し、町屋、商家などが往時を思い起こさせてくれます。



ここは
スタンプを
おしえてね!

ふこの
近松の里めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



行き交う人々の足をとめる
通関の犬様。



恋話
KOI BANA

花言葉: 純潔、憧れた恋人

「あしひきの 山桜花 一日だに 君とし見れば 我れ恋ひめやも」/大伴家持
山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいとは思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。

★メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」



悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

6

福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定めました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに
スタンプを
おしね!

そこの
世社のまぐろBOXに
スタンプが
入っています。



ピンクと白の千日紅
まじり花がゆらゆら。



見どころ



本堂正面軒下に
不思議な霊獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「狸」。霊獣 狸は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



近松との縁



近松が遊んだ
歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン

恋話
KOI HANA

花言葉 幸福、純情。幸福が戻ってくる、純潔

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一歩踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

西番天満神社

にしぼんてんまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした『天神記』という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃れ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を刻み、父の道真として朝夕拝しました。その像を収めた天満宮の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ウメ 恋話

KOI BANA

花さ重・高潔な心、潔白、澄んだ心、忠義

「春なればうべも咲きたる 梅の花 君を思ふと 夜寐(よい)も寝なくも」(雪駄守飯氏安麻呂 梅は「君」のこと。恋する人を思うと夜も寝られない…寝れない夜の恋心を詠んでいます。)

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみよう」



リーダーシップを発揮した松平昌親公を学び能力アップ

map ナンバー

8

吉江藩館跡

よしえはんやかたあと



吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



? なんだろう



松平昌親公

瑞澤寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後を子の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の選定を行わねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は陣屋を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩

立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。





ナデンコ

恋話

KOI BANA

花言葉：純愛、恋慕

「ひさかたの雨は降りしく なでしこが いや初花に 恋しく我が背!」大伴家持
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕
る恋心を詠んでいます。

★メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」



「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

近松門左衛門坐像

(近松情報案内所)

ちかもんくんとさんざんざん



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多感な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の里の案内所

ここに
スタンプを
おしえてね!



ひとやすみ



近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシがたっぷり、「近松の里 たちまちめぐり」の情報拠点となる案内所です。無料レンタサイクルも完備しています。

ちかもんくん号に乗って
散策しよう!



無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料レンタサイクルをご利用ください。

連絡先: 現地にてご確認ください



ユリ

恋話

KOI BANA

花言葉: 純潔、誠意、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下延(は)ふる 心しなくは 今日も経めやも」/大伴家持 百合は「あとで」と重なる言葉。後で逢えると思わないと、今を過ごせない気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸。どちらも大事なら自分のペースを大切に」



信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

大谷公園

(実のなる公園)

おおたこうえん



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだならば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」が「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに
スタンプを
おしえてね!

この
近松の里めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



夕陽から夕闇へと...
神秘的な情景に出会えます。



ひとやすみ



実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通し「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、見晴らしの良いのどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いるいるな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

恋話

KOI BANA

花言葉:正義、恋している時のあなたが好き、さびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様に使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

※メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間も必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や華を供えて通達したとあります。寺の西側には、徳川家家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここに
スタンプを
おしえてね!

その
沿線の里の「IBOX」に
スタンプが
入っています。



大きな花の実は、
毎年見事な花を咲かせます。



見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財
推定樹齢400年余の御神木(大
杉)の、まっすぐ伸びたその姿に
「子どもがすくすくとまっすぐ育ち
ますように」と祈願する人も少なく
ありません。その傍らに、室町時代
から近代にかけて造立された117
基の石造物が遺存されています。
これほど多く遺存しているのは、市
内でも稀であり貴重だそうです。



近松との縁



幻想的な椿に何を思う…
境内に群生する椿。散りゆく花が
辺りを深紅に染めるその様は幻
想的で美しい。幼少の頃、この寺
の一角を借り住んでいたといわれ
る近松は、どんな思いでこの花を
愛でたのでしょうか。



ツバキ

恋話

KOI BANA

花言葉 完全な愛、完璧な魅力、理想の恋

「あしひきの 八家の椿つらに 見とも飽かぬや 福あてける君!」大伴家持
見飽きるのでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも
登場する、神聖な樹木です。

※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」



近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

榎お清水

えのきおしょうず



春慶寺本堂榎の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様に手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笥谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のバチの形をしています。



ひとやすみ



お不動様が見守るお清水
近松の時代から、流れることなく今なお水を湛えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、適度の炭酸ガスを含んでいるまるでやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁



近松少年が親しんだ水辺
お清水付近は「池泉広場」として整備されています。その奥の底から湧き、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち着かせてくれます。また、近くには蓮池や中瀬池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。

ハス
恋話
KOI BANNA

花言葉: 清く白く、純潔、静寂
中国の伝説、夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に燃えあがり、愛の象徴とされるかんざしをうっかり落ととしてしまう。川の主は急いで水面に浮上するが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は聲を返すことができず、恋は果たなかった。
※メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」

江戸時代を代表する文豪 近松門左衛門

ちかもんきえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653~1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや愚かさ、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門住居之妻
(現) 近松文学館

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、
人と歴史が見える「近松の里」づくり」をテーマに、
住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪
近松門左衛門により親しみ、また近松文学に対する
理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづ
くり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外
にPRするため公募により決定。近松門左衛門の少年
期をイメージして平成10年に誕生しました。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉江町15-77-7 ※無料レンタサイクルあります。

www.city.sabae.fukui.jp/index.html (鯖江市ホームページ)

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376

■さばえ近松文学賞 ～恋話（KOIBANA）RETURNS～ ■主催者

令和5年9月28日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-00005

福井県鯖江市杉本町702-2（立待公民館内）

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版編集】

発行社 [DoCompany出版\(ボボブックス\)BoboBooks](https://www.doco.jp/)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233

<https://bobobooks.com>